

---

# ブラックコーヒー（微糖）

詩穂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブラックコーヒー（微糖）

### 【Nコード】

N4880E

### 【作者名】

詩穂

### 【あらすじ】

「例えばの話。淑女諸君に問おう」大学四年生の、アルバイト先での出会い。

## その1

例えばの話し。

淑女諸君に問おう。

その人は無口で、どちらかといったら若干雰囲気怖くて、  
たまたまその人と寒い冬、一緒に歩いていて、途中見えた自動販売  
機でその人が、自分に対して飲み物を買ってくれたら。

がしゃん、と落ちてきた飲み物をぽいっと投げて渡されて、  
受け取ったそれが、暖かいブラックコーヒーだったら。

あなたは、どう感じるか？

「ちょっと、本当に整形外科で働いてたの？」

小児科のアルバイト先で、コンピュータ入力途中、目が合っ  
つけれられた言葉は、一瞬あたしを金縛りにした。

前のバイトをやめて4ヶ月、新しいアルバイト先は同じ医療関係  
はあるものの、やはりあたしにとって勝手が違った。

あたしは前に働いていた整形外科の院長の顔を思い浮かべて、  
実はウソでしたなんて言おうかとさえ考えた。

こんなに出来ない人間が働いていると思われたら、以前お世話になった院長の顔に泥を塗るような気がしたからだ。

あたしは全身を強張らせたまま、曖昧にうなずいた。

大学四年生の6月。

就職活動もなんとか終えて、再びアルバイトを始める。今のアルバイト先は、結構厳しく言う人が多い。

泣けないほどショックを受けたのは、久しぶりだった。

怖い顔で見下ろしているのは山口さん。彼女もその人間の一人だ。目力が強く、すぐに逸らしてしまいたくなる。

シフトの関係で、山口さんと一緒に入るときが苦痛だった。

「ごうでしょ」

ため息をつきながら言う。

あたしは小さくはい、と答える。

目を見れない。

怖くて見れない。

「単車は危ないからね。気をつけてね」

帰り際、原付でアルバイト先まで通っているあたしに申し訳程度に

言う言葉は、本心から出ていると思えなかった。

山口さんはきつとあたしが嫌いで、めんどくさい子だと思って、あたしも山口さんが苦手だった。

それでも何とか一週間が経ったある日、  
まだ正式にシフトが決まっていないうあたしに山口さんが聞く。  
「次、いつ入るの？」

あたしは山口さんのシフトを見て、うまく避けたかった。  
でも研修期間である以上、入れる日は入る、が鉄則だった。

「……あさってです」  
あたしは最低限の笑顔を浮かべて言う。

「よし。あたしもその時入るから」  
勘弁して欲しい。  
何でこうタイミングがいやに合ってしまうのか。

「やまぐつちゃんか認めなきやいけないからね」  
冗談で他の先輩が言う。別に山口さんがトップというわけではない。

あたしは最低限の笑顔を浮かべる。

あたしは山口さんが、苦手だった。



## その2

「この花、どうやって咲かしてるんですか？」

午前中のアルバイトが終わって帰り際、山口さんは花壇の世話をしているおばちゃんに声をかけた。

あたしは横目にそれを見る。

「簡単よ。これはね……」

その花の咲かせ方について、「これはね」以降を覚えていない時点で、いかにあたしが興味を持っていなかったかが分かる。

うれしそうに話すおばちゃんに熱心に耳を傾ける山口さん。

「何でだろう。やまぐつちゃんからもらった時はすごい元気だったのに、あたしが世話したら枯れちゃった」

そう言っただけと笑うのは山口さんと同期の先輩だ。

「構いすぎなんだよ」

山口さんは笑う。サボテン枯らしちゃうタイプでしょ？という質問に対して、先輩は「あ、分かる？」と言った。

「ほっときすぎてもいけないけど、構いすぎてもダメ。それにそれぞれ個性がある。だから同じ種類のものでも、同じように世話して両方きれいに咲くなんてことはないんだよ」

血液検査の表を見ながら、山口さんは言う。

「やまぐつちゃん上手だもんね〜」

「育てた植物と、たまたま相性がよかったのよ。あ、後発不可入れ忘れてる」

横でこそごととコンピュータ入力をしていたあたしは、はっとなつて、入力しなおす。

「や、山口さんは朝早く起きるんですか？」

更衣室で鉢合わせしてしまつたため、最低限話す。以前起きるのが早いと誰かと話しているのを聞いたことがあり、それで聞いてみる。

「うん〜そうだね。朝5時に起きる」

朝5時！どんだけ早起き！？

「それで犬の散歩して〜朝食作つて〜洗濯して〜洗い物して〜掃除して〜ここに来る」

あっさり言っていることはすさまじい。

「それだけこなして来てるんですか？」

「そうだね〜だからここで休んでる。こんな楽な職場ないよ〜。座つてられるし」

いや、それはそうだが。

「それに、帰って掃除とかしたくないしね」

朝だつてしたくない。

なんかの基準が山口さんとあたしでは違っているのだろうか。

あたしは「すごいですね」と言つて控え室を出る。



「あなた、もういけるんじゃない？」

研修期間は人によって違う。

ここは基本二人体制なので、一人出来なきゃそのままもう一人の負担になる。

「うん。いけると思うよ」

そう相槌を打ったのは山口さんだ。

あたしはどきり、とかしこまった。

「いけるね？」

その問いかけに、あたしは曖昧に微笑む。

### その3

その頃からだろうか。

あたしは山口さんの話を聞くようになる。

今まで全く聞いてなかったわけじゃないが、意識して耳をそっちに向けるようになる。

「一教えてもらったら、百やる。社会に出るんだったらそれを覚えておきなさい」

いつだったか山口さんはそう言った。

あたしは「はい」と返事をする。

「一度職に就いたら何が何でもそこにしがみつくこと。転職は、考えない方がいいわ。条件が下がるだけだから」

あたしは「はい」と返事をする。

「社会に出る前に、今のうちにたくさん学んでおきなさい。きっと役に立つから」

あたしは「はい」と返事をする。

山口さんは、笑った。

例えば言いにくいことがあるとき、あたしの場合、  
「あのね、あたしも出来てなかったりすることがあるから、そんな  
にえらそうなことは言えないんだけど、ここはね………」  
と言っ。

山口さんの場合

「これはこうでしょ。何度言ったら分かるの」

山口さんは言葉を包まない。

相手に伝えるのはあくまで用件だけだ。

その代わりに、自分を護ることもしない。  
自分が失敗した際の、言い訳にしない。

それは強い覚悟の上で成り立つ、強い

投げてよこされたブラックコーヒーはあたしには熱くて、苦すぎて  
飲めない。  
一口飲んで顔をしかめて、どっか目の届かないところにやりたく  
なる。

それでも飲まなければならなくて、ちみちみと一口ずつ口に運ぶ。

山口さんは一息にぐい、と飲み干すと、口を拭う。  
あたしはそれでもまだ、ちみちみと口に運ぶ。

そうして、飲んでいる内に気付く。  
それは暖かく、飲みやすい温度に変わる。  
それは、少しだけ、ほんの少しだけ、砂糖が入っている。

その微々たる甘さを求めて、やはりちみちみと口に運ぶ。

山口さんは待っている。

あたしがそれに慣れて飲み終わるのを、文句を言わず待っている。

あたしは飲んでいる途中で顔を上げる。

「今日、星きれいだね」

山口さんは空を見上げてそう言つと、うれしそうに笑った。

## その4

「辞めるんだって、山口さん」

一瞬の真空。

あたしはその声が飲み込めない。

ちよつと待つて、今なんて……………。

「8月までらしいよ」

あたしは喉元までせりあがってくる焦燥を、押さえ込むのに必死になる。

新シフトが発表された。

あたしは週4。その半分は山口さんと一緒だ。

山口さんは週2。つまり、アルバイトに入る時は必然的にあたしと一緒にになる。

「よろしく」

そう言った山口さんを、初めて本当の笑顔で受け入れられた直後の話だった。

「内緒よ」

そう言うのは、やはり他のバイト先の先輩だ。

心臓が暴れ狂う。

疑問符がそこらじゅうに浮かぶ。

なんで。なんで。なんで。

「大丈夫よ。いけるわね」

山口さんがいなくなる。

「単車危ないから、気をつけてね」

しつこいほど念を押して言っていたのは、決して申し訳程度なんかじゃなくて、本心から出た言葉じゃない、なんてことはなくて。

初めて怒られたときよりもずっとシヨックを受ける。

ガードをゆるめたときにあてられたパンチは、容赦なく腹をえぐった。

あたしは脳内を大きく占めていた要素が抜け落ちる感覚がする。

強い憧れだった。

普通怯むもんだと思う。

だってブラックコーヒーなんて苦いし、なんたって苦いし。

眉をしかめて遠ざける。

たぶん山口さんだってそんなに好きじゃないはずだ。

なのになんであんなにおいしそうに飲む？

なんであんなに早く飲み込める？

なんであんなふうに笑える？

あたしは確かに山口さんに惹かれていた。

自分がないものを確かに持っていて、

それはあたしが常に欲しがっているもので、それをなんなく取り込んでいて、

「これはね」

処理の仕方を教えるためにその場へ行く。

あたしは刷り込みの完了したひよこのように、どこにだって出口さんの後を追う。

山口さんはいつだってエネルギーに溢れている。

あたしは近くにいただけで、そのパワーがもらえるような気がしていた。

そうして一番苦手だった山口さんが、一番好きになった。

だから怖かった。

8月にいなくなる。

週2で会える贅沢とともに、傷口が大きくなるような気がする。会わない人間がいなくなるのと、大して自分に影響はないが、会う人間がいなくなるのは、それが大切な人間であればあるほど、受けるショックが大きくなる。

あたしはブラックコーヒーにひるまない山口さんが、大好きだった。

「学んでおきなさい」

あの時、自分がいなくなるのが分かってたんだ。だからあんな風に言っただ。

現実が変わらなくて、

山口さんがいなくなるのは事実で、

ならばあたしはせめていい思い出になるように、  
足手まといにならないように、  
最低限、

「ほらここ、抜けてる」

「はい、すいません」



あたしはブラックコーヒーを好きになる。

いつかきつと、笑って飲み干す。だから

「うん。もうあたし知らないね」

そんなこと言わないで。

そつと隠れていた、微々たるお砂糖。

あたしはブラックコーヒーを好きになる。

#### その4（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございました。

## おまけ（前書き）

その名のとおり、おまけです。

要はグリコのおもちやの部分なんで、横目に流していくかんじで読んでいただければと思います（実際のおもちやは流さなくても）

## おまけ

\* \* \* \* \*

〔2007年、4月のmixi内の日記より〕

女性タレントである飯島愛が、昨日金スマを最後の出演番組として引退しました。

あたしにとって彼女は自分の中で特別な位置を占めるわけではなく、「引退」と知らされなければ、特にこれといった支障もなく過ぎていった事でしょう。

「いなくなる」と聞かされるまではその存在を意識するわけではないのに。

これは私の中ではある意味「死」と似たような感覚を覚えました。

一昨年前私は小学校来の友人を一人、失っています。

高校が違った彼女は当時、常身近にいた訳ではありませんでした。久しぶりに遊ぼうと言われても、そう毎回遊んだわけではありませんでした。

「また今度」が「絶対」存在していたためです。

いなくなっただけから「あの子はとてもいい子だった」と言うのはナン

センスです。

それはどんなにその子と仲がよくても皆、同じことを口にするからです。

思い出に浸って完全な「いい子」にしてしまうのは簡単です。

でも、それ以上に大切なのは、自身の身近に留めておくことではないかと考えました。

精神的に、大切な「友人」であった彼女を勝手に「完璧」に祭り上げて、寂しい思いをさせないように。

飯島愛は体を半分に折り曲げて、何度も深々とお辞儀をし、

いつも当たり前前に目の端に留めていた笑顔を残して、舞台裏に消えていきました。

それこそ大切な「記憶」であり、

こらえきれずに泣きました。

ごめんね。

めぐさんでもそうしたよね。

いたずらがばれた子供みたいな笑い方をして。

まっすぐな笑顔よりもそつち方がずっと身近で、一緒にいたずらをしたときを思い出すよ。

そのときだけは限りなく「身近な存在」で。

(以下略)

\* \* \* \* \*

……という前置きをもってして（なっが！前置きなっが！）

山口さんの話にプラス を付け加えたいと思います。  
キレイすぎる記憶には、したくないので。

バイト先で独り立ちして、正規の通り二人で入るようになりました。  
週2で with 山口さんです。下記は昨日、3日前の出来事です。

山口さんはまず朝来るなり、更衣室のドアを勢いよく開けます（ノックなし）

そしてあたしのほうが先に来ているにも関わらず、絶対あたしより先に出て行きます。

そして、更衣室のドアを閉めていきません。あたしまだ、着替えるんですけど（逆セクハラ）

勤務時間中、暇ができるとみんなの分のお茶を入れてくださいます。そんなもって自分だけ少々忙しかろうと関係なく休憩にいそしみます。  
っていうか、あたし一人残して堂々とお茶を飲みます（山口さーん！）

でも受付込み合ってわっちやわっちやしていて、気が付くといくつかの処理が終わってます。

横を見ると、山口さんが「あ、終わったわよ」とどっかり座ったまま、涼しそうな顔で言います（ 惚れる ）

でも実際込み合ってきたときに、患者さん同士の車の接触があつて、山口さんがそれに立ち会います。

それはいいんです。でも帰ってきた時、代わりにコンピュータ入力しているあたしにむかつて

「うん、いけるわね」と言ってお茶のみに行きます。ここはどんなんだ（笑）

や、山口さん、これ、山口さんの仕事……

でも暇ができたとき、何もしゃべらなくても（勿論仲良くしゃべったりもする）じっと傍にいます。

山口さんは「これを飲んだら絶対痩せる！」のチラシとにらめっこしています。

あたしはじっと、傍にいます。

犬じゃなくて良かったと思うのはこういう時です。

だって「あのさー」っていわれた時、ぱったんぱったん尻尾振ってるのばれたら、なんか、やです。

それに、怒られてるときでもぱったんぱったんやったら確実に変な子です。

でもたぶん山口さんが「（そこに）お座り！」って言ったたら、確実にちゃんと座ります。だめだこりゃ。

あーあ。なんだかんだ言っつて、結局好きなんですわ。

祭り上げないように頑張ったはずが、今に時点で祭り上げられてる。  
むしろ崇拜。おおー（拜んでる）

あ、楽しんでいただけたら幸いです。なんて  
では。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4880e/>

---

ブラックコーヒー（微糖）

2010年10月8日14時12分発行